

給餌は、種エビを入れ10日程は朝、昼、夕の3回やり、それから1ヶ月間は朝、夕の2回に減らし、以後は、日中ほとんど摂餌しなくなるので夕方の1回にしている。

給餌方法は、アサリ等の貝類は殻を砕いて、魚類やイカ等は細かくスライスし、餌料の全量を池全体にまんべんなく散餌している。

エサの量は種エビを放養して6~7日ばかりは、放養総重量の1.5~2倍も与えるが、成長するに従いエサ量は減少し、10g程に成長すれば15%、20g程では5%程が投餌量とされ、通算すると増肉係数は10~15のようである。すなわち、1Kgのエビを生産するために10~15Kgのエサが与えられている。

摂餌は水温によって大きく違い6~8月の26°C~30°Cの 때가最もよく、以後、水温低下に伴い悪くなり、11月に入り11~12°C以下になれば摂餌せず、翌年の3月までは冬限状態に入り水温上昇を待つて摂餌開始をする。

給餌で最も大切な点は、池底悪化の原因となる残餌をなくすることで、それには、常に放養量を把握し、エサの量を適格に計り無駄が生じないようにすることが刊要とされている。

へ 出 荷

5~6月に放養した0.02gの種エビも、8月には10g、11月には20~25gに成長し商品サイズとなる。しかし、車エビの価格は時期により大きな変動があり、1年間を通じての高値は、天然物が出荷される前の3~5月の時期である。したがって11月~3月までは越冬させ3月以降水温上昇に伴って活動開始をし脱皮する前に出荷している。

今年はこの時期にKg当り平均価格は4,000円取引されたとのことである。しかし、越冬に際しては、いくらかの歩減りがあるため、価格上昇による利益分と歩減りによる損失分との差引は充分に考える必要があるとのアドバイスを受けた。

出荷先は80%が東京、20%が大阪、名古屋に向けている。車エビの値段は活か死かで価格差が大きく、まず活でなければいけない。それには、最後の出荷取扱いまで慎重に扱うことが大切である。

荷作りは、段ボール箱にオガクズを詰め、その中にエビを並べている。オガクズの役目については単なる充填材ばかりでなく、断熱材としての意味もあるため、乾燥したものが使用されている。荷作りでいま一つ大切なことはエビの疲労度を軽くすることとされている。

荷作りの際に、エビはとび跳ねたりし作業がやりにくいというえに、疲労し輸送中のヘイ死が多くなるので、それを防ぐため池水温が高くエビの活動が活発な時は、取揚げたエビを冷却水槽に入れ、水温を10°Cぐらいにしてエビを不活発にしてから荷作りがなされている。